



[海の状況 (6/21~7/20)]

神子表面水温……期間の中頃はかなり高め（平年より1.0~1.5℃程度高め）からはなはだ高め（平年より2℃程度高め）で推移したが、後半になるとかなり低め（平年より0.5~1.0℃程度低め）からはなはだ低め（平年より2.0℃程度低め）の日がみられた（図1）。

米ノ表面水温……期間の中頃までは平年並み（平年より±0.5℃）で推移したものの、後半になるとかなり低め（平年より1.0~1.5℃程度高め）からはなはだ低め（平年より2.0℃程度低め）で推移した（図2）。

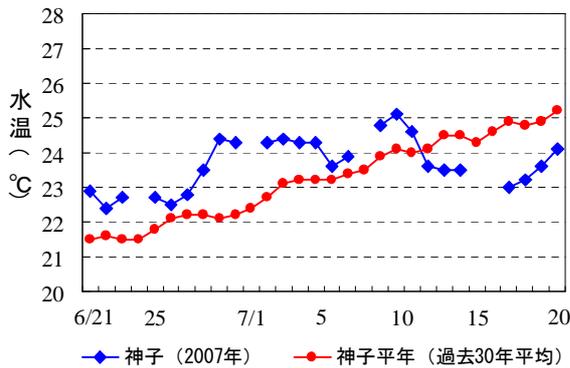


図. 1 若狭町神子地先における表面水温の推移

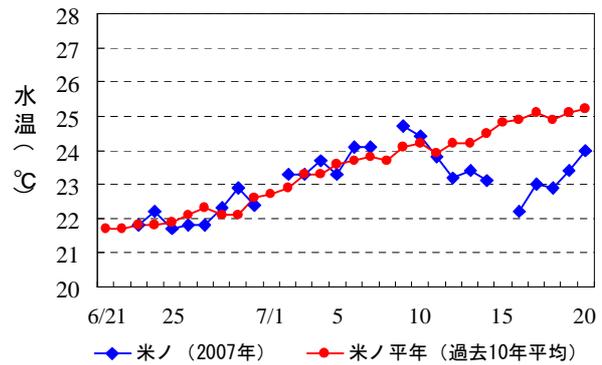


図. 2 越前町米ノ地先における表面水温の推移

100m深水温……若狭湾沿岸域には15℃台の水域が広がっていた。

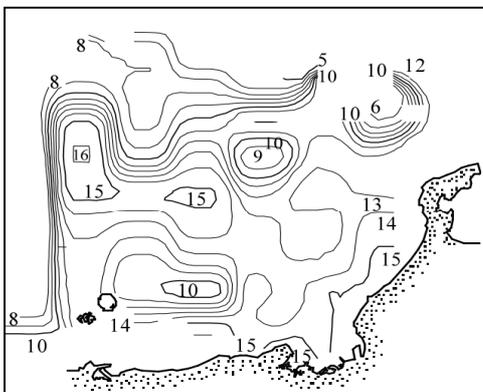


図. 3 2007年7月上旬の100m 深水

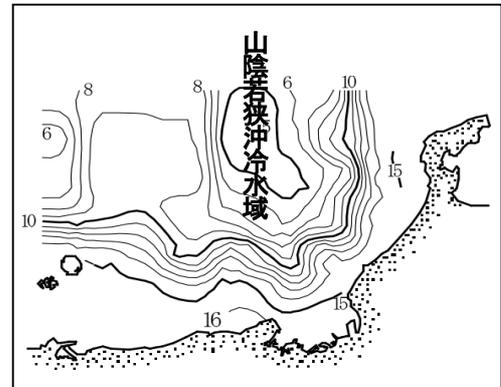


図. 4 2006年7月上旬の100m 深水

平成19年度第2回日本海海況予報

日本海区水産研究所が、平成19年7月~9月までの日本海海況予報を発表しましたので、関係部分を紹介します。

- 山陰若狭沖冷水域は、3月~5月にかけて規模は小さく接岸状況は平年並みで経過していましたが、6月には離岸しました。今後の冷水域の張り出しは“弱め”で推移するでしょう。
- 対馬暖流域の6月の表面水温は、ほぼ全域で“平年並み”~“やや低め”で経過しており、今後は“やや高め”で推移するでしょう。
- 対馬暖流域の50m深水温は、日本海西部においてかなり高めで経過していましたが、今後は“やや高め”で推移するでしょう。

(瀬戸 久武)

〔漁の模様〕

2007年6月の県内の総水揚量は1,169tで、2006年同月を564t下回った。サワラ(2007年；157t, 2006年；31t)、スルメイカ(253t, 115t)等は上回ったものの、アジ類(311t, 774t)、サバ類(38t, 94t)、トビウオ(75t, 325t)、マダイ(8t, 28t)等は下回った。

漁業種類別の状況

定置網 ……サワラ等は上回ったものの、アジ類、サバ類、ブリ類(ワラサ銘柄)、トビウオ、マダイ、スルメイカ等は下回り、全体で前年を72t下回った。

底びき網 ……ニギスなどは上回ったものの、ハタハタ等が下回り、全体で前年を6t下回った。(小型底曳網漁業は6月から8月は休漁のため、漁獲量は低水準。)

釣り・他 ……ワラサ、マダイ、アナゴ、アオリイカ等は下回ったものの、スルメイカが大きく上回り、全体で前年を162t上回った。

〔県内主要漁業の6月の漁獲量〕

(調査対象市場：三国・越廼・敦賀・早瀬・小浜の各漁連支所、福井市・越前町・若狭高浜の各漁協)

(単位：kg)

定置網			
魚種	2007年	2006年	97-06平均
カタクチイワシ	1,250	10,504	51,355
アジ類	311,090	772,249	446,278
サバ類	38,260	93,843	68,368
マグロ類	3,053	4,386	9,256
カツオ類	413	139	5,527
ブリ類	49,246	60,817	48,580
サワラ	156,544	31,167	9,125
トビウオ	75,008	324,482	156,154
マダイ	4,198	19,199	9,678
クロダイ	944	1,517	1,205
スズキ	6,359	6,048	1,614
ヒラメ	909	1,517	1,401
カマス	6,600	5,028	10,432
フグ類	5,429	11,708	10,566
タチウオ	676	120	680
スルメイカ	15,628	30,926	19,817
アオリイカ	632	1,950	1,945
ケンサキイカ	9,732	20,905	19,565
その他	9,214	19,198	58,862
合計	695,186	1,415,703	930,408

底びき網のつづき			
魚種	2007年	2006年	97-06平均
その他	1,694	1,738	5,093
合計	39,740	45,467	55,700

釣り、延縄、さし網、その他			
魚種	2007年	2006年	97-06平均
アジ類	281	1,278	711
サバ類	28	359	530
ブリ類	6,405	2,729	3,497
トビウオ	404	805	260
マダイ	3,366	8,130	5,853
キダイ	5,081	4,523	2,966
アマダイ	4,518	5,613	6,298
スズキ	4,969	5,795	5,860
ヒラメ	2,248	2,665	3,526
その他カレイ	3,958	3,912	5,045
カマス	25	497	120
タチウオ	2,562	63	517
アナゴ	4,386	5,968	6,599
メバル類	5,139	3,556	5,173
キス類	1,027	701	796
スルメイカ	237,288	84,180	311,473
アオリイカ	3,394	5,629	12,479
ケンサキイカ	2,326	3,301	10,058
ソデイカ	1,020	0	12
タコ類	37,247	34,983	43,204
その他エビ	2,057	1,343	2,288
その他	106,809	96,183	88,160
合計	434,537	272,212	515,424

底びき網			
魚種	2007年	2006年	97-06平均
マダイ	804	672	1,689
アカガレイ	1,136	1,352	3,339
その他カレイ	790	792	3,295
アナゴ	45	27	105
ハタハタ	60	4,205	1,370
ニギス	980	190	1,244
タコ類	576	875	1,174
アカエビ	32,135	32,809	34,288
その他エビ	1,520	2,807	4,102

総計	2007年	2006年	97-06平均*
	1,169,462	1,733,382	1,606,698

*まき網による漁獲量を含む。

〔近府県の漁模様〕

(6月下旬から7月中旬の漁獲状況……1日1隻または1統あたり。京都府の定置網漁獲量は舞鶴漁連への1日あたりの水揚量。)

石川県 …… 定置網 …… マイワシ10.0kg、アジ263.0kg、トビウオ類54.4kg、スルメイカ31.4kg
 京都府 …… 定置網 …… マアジ45.2 t、カタクチイワシ99.3t、トビウオ14.5t、サワラ106.9t
 兵庫県 …… 定置網 …… アジ962.3kg、カマス26.4kg、サワラ87.6kg、トビウオ111.1kg
 鳥取県 …… まき網 …… マイワシ4.1t、マアジ14.3t、ウルメイワシ1.7t、ブリ類0.6 t

(瀬戸 久武)

アオリイカの種苗生産について

「アオリイカ」はイカ類の中で最もおいしいと言われているイカで、成長も非常に早いことが知られています。近年は県内の一部の地域において、初秋に天然の小型のアオリイカを漁獲して短期養殖しており、活イカ料理等に利用されています。そこで、水産試験場では今年からアオリイカの養殖に関する研究に取り組むことになりました。

天然アオリイカの短期養殖に取り組まれている方の多くは、9月以降の釣獲により種苗を確保しているようです。水産試験場は、現在行われている短期養殖の現状を解析するとともに、効率的な養殖手法を検討していきたいと思っています。また、この天然種苗の利用では、出荷時期やサイズは天然のイカと同じになり、付加価値を付けるのが困難です。そこで、早期に種苗生産することができれば、早くイカを大きくすることが可能となり、高付加価値化につながると考えられます。

今年は、アオリイカの種苗生産試験に取り組んでいます。アオリイカの産卵は、主に5月末頃～7月にかけて行われていると思われます。卵から孵化したイカの外套長はおよそ5mmです。孵化したイカはすぐに餌を食べます。適した餌の種類について検討しました結果、最初は生きた餌が必要であり、魚の稚魚が良いこと、餌のサイズが重要であることが解りました。餌の魚は、ヒラメ、アジ、サバの稚魚について検討しましたが、サバの稚魚が良いと考えられました。今飼育しているイカをうまく育てて、海面での養殖試験にもっていきたいと思っています。

アオリイカ養殖は、半年足らずで出荷できるため、短期収穫型の効率の良い養殖新魚種として期待されています。アオリイカ種苗の量産についてはまだ全国でも成功事例は無く、課題もたくさんありますが、技術開発を進めていきたいと思っています。

(畑中 宏之)



写真1 産卵器に産み付けられたイカの卵



写真2 孵化直後のイカ



写真3 飼育中のイカ

平成19年スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海側の各試験研究機関によるスルメイカ漁場一斉調査が、6月下旬から7月上旬にかけて行われましたので、その結果についてお知らせします。

(1) 福井県の調査結果

福井県沖合の4定点において、釣機6台を用いて毎晩約8時間ずつ釣獲試験を行いました。

- ・漁場水温…表面水温は、21.5～23.4℃（2006年；19.1～20.6℃）、50m深水温は15.5～18.1℃（同；10.2～16.1℃）でした。
- ・漁獲状況…総漁獲尾数は2,118尾（2006年；1,263尾）、CPUE（釣機1台1時間あたりの漁獲尾数）は平均10.8尾（同；9.2尾）でした。
- ・体長組成…胴長（外套背長）は、7月4日の調査定点では16cm未満の小型個体が45%を占めていましたが、概ね17～18cm台の個体が主体で、昨年の20cm台より小さくなりました。

月日	7月2日	7月3日	7月4日	7月5日
調査位置	N 36°39.9' E 134°58.9'	N 38°00.4' E 135°01.2'	N 37°40.2' E 135°39.8'	N 36°20.0' E 135°36.5'
漁獲尾数	604	767	320	427
CPUE*	12	15	7	9
平均胴長(cm)	18.6	17.4	17.5	17.9
表面水温 (°C)	21.6	22.0	21.5	23.4
50m深水温 (°C)	15.5	16.7	16.0	18.1

※ CPUE；釣機1台1時間あたりの漁獲尾数

(2) 日本海全体の状況

日本海区水産研究所の取りまとめによると、すべての調査定点におけるCPUEの平均は11.18尾で、昨年(15.80尾)の71%、近年平均(17.21尾)の65%の水準でした。分布状況は、新潟県から秋田県沖では17～18cm台で分布密度は低水準でしたが、能登半島以西では分布密度の高い調査定点が見られました。大和堆以西の沖合域では大型個体が少ないものの、分布密度が高い調査定点が見られました。6月までの西部日本海の漁況は5月を除き、昨年および5カ年平均を概ね上回っていました。今後の見通は、日本海西部は10月頃を中心に近年を下回りますが、沖合域では9月までは低調で、10月以降に回復が期待されます。また、本州北部日本海においては活発な漁場形成は見られないでしょう。

本調査では、各機関により標識放流が行われました。標識の付いたスルメイカが採捕されましたら、水産試験場までお手数ですがご連絡願います。
(瀬戸 久武)

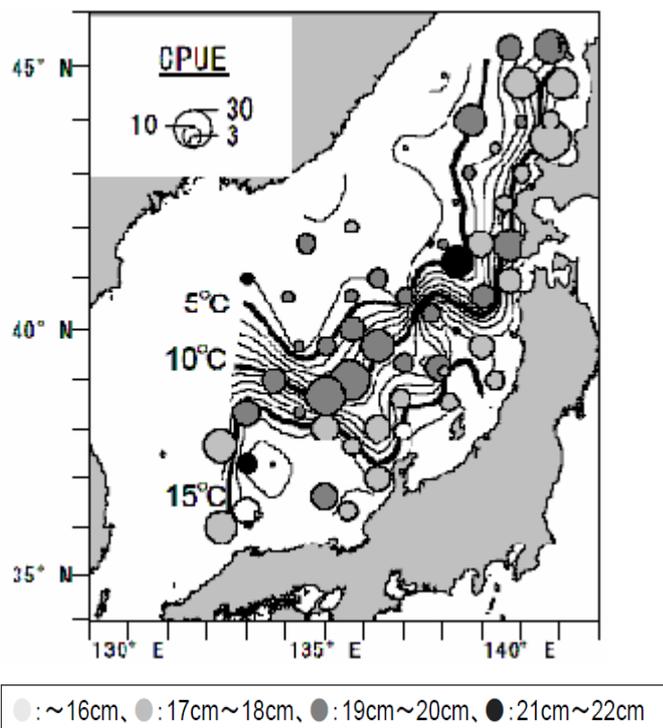


図.1 日本海におけるスルメイカの分布状況